老兵は退場

「しもうたことしたよ。ここでは死にとうない」—北九州市某老人ホームの伯母を彼女が訪問した時、のっけに言われた言葉である。九十七歳になって義理の子らから、こんなひどい所にやられたと、悔しさありあり。

「あなたの母は子のない私の死に水をとってくれると言うたんに、早う死んでしもうた。あんた早う迎えに来ておくれ」伯母を引きとる心づもりはできていた。次の訪問は昼食時。「わたしゃご飯一椀でええよ。おかずはいらん。あんたとこ行っても麦飯でいいんよ」「おしっこも一人で行ける、ウンチも四日に一回よ」手間のかからないことをしきりに示そうとする伯母のいじらしいことよ。

その次の訪問はちょうど誕生祝いの日だった。お赤飯というので皆が華やいでいた。ふたをとると赤飯は丼の中にしゃもじで一掬(ひとすくい)なりつけられたまま。犬猫にやるのと変わりない心なさ。彼女は自分のホームと比べていた。こんな職員はわがホームでは即日首だ。

四度目は…目の周辺は黒ずんではれ上がりパンダのようになり、頭の傷は手当もされず血糊がついたまま。伯母の声はかすか「帰るのをあきらめたとよ…でも、どうしてこんなに血の繋がりが恋しんやろうね」。この一言が彼女の胸を貫いた。すぐ退職願い提出。理事会は最大限の、初の功労金贈で報いた。賞詞に「あなたが実践唱道したおむつ随時交換と床ずれゼロの旗じるしは日本福祉史上不滅です」と。その人の名は北崎ハツ子。任運荘と共に歩いた十六年を締めくくって「これからは伯母が私の支えです」と。老兵は静かに退場した。

（一九九一年三月二十七日）